

第64号

● 目次 ●

巻頭言 東北アジア研究の課題としての「越境」と「共生」	1
最近の講演会・研究会等	
公開講演会 東北アジアの自然誌	2
日露ワークショップ 日本文化を教えるII	2
国際ワークショップ 東北とクライストチャーチ	3
加藤九祚先生講演会	3
日露歴史学者セミナー	4
共同研究研究会	4
上廣歴史資料学研究部門主催講座	5
センター関連出版物(1)	5
客員教授紹介	7
受賞	7
センター関連出版物(2)	7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言

東北アジア研究の課題としての「越境」と「共生」

 東北アジア研究センター長
 岡 洋樹

東北アジア地域研究の課題とは、ロシア・中国・モンゴル・朝鮮半島・日本に関わる越境的な課題を、東北アジアを枠組みとして捉えなおすことである。何か文化的な特徴を指標として地域共通の特徴をあぶり出すことのみではない。だから地域の多様性や対立的な関係といった課題群は、むしろ東北アジア地域を研究枠組みとして成立させる根拠となるのである。このような「境」は、国境に限られたものではない。東北アジアの特徴の一つに比較的少数の大国による広域の統治があるが、それは多数の国が境を接するヨーロッパのような地域に比べて、この地域がより均質だということを意味しない。むしろ国境が多文化的な構造を内部に囲い込んでいるのであって、文化的な境界は随所に存在する。また民族の分布や人・物の移動が境を跨いで生み出すネットワークやコミュニティーなど、跨境的な課題もある。「越境」は、これからも東北アジアの基調であり続けるだろう。そうすると当然問題になるのは、「越境」がもたらすものが何なのかである。それは当該の社会を不安定化する一方で、移動した人々が生きる現場の日常において、共生の構造をも生み出さざるをえない。それがまた地域的な特色を帯びることで、新たな多様性のまだら模様が生まれる。

19世紀以来の近代化も、現今のグローバル化も、文化的な共通性ととも、新たな多様性の構造をも生み出した。

そして「境」が再生産されると同時に「境」を越える共生構造もリニューアルされながら現出し続ける。だから「共生」の構造も東北アジアの一方の基調なのである。このような弁証法的な構図が、地域の歴史理解と将来像獲得の基盤に伏在しているのではないだろうか。地域を個別の国や民族の枠でのみ考えると、こういった境界的な事象は見えにくくなるばかりでなく、何か不正常なものとして視野から落とされてしまいがちである。しかしやっかいなことに、地域を対象とする研究の多くが、国や民族を枠組みとし、対応する言語を学ぶことを要求されるから、ポリグロットになるのでもなければこれを越えることがむずかしい。そういった事情も、境界の社会がもつ多言語状況を捉えにくくする背景にある。しかしだからと言って大言語だけでは、そのような現場のリアリティーを十分に捉えることは難しいだろう。一人ではとても無理だということであれば、研究者は国や民族に立てこもるのではなく、境界を越えた向こう側に出て、そこの研究者と対話することが必要となる。地域研究はそのような場でなければならぬのではないかと考えている。



最近の講演会・研究会等

1 公開講演会
東北アジアの自然誌
 —地球・自然のダイナミクス—



当日の様子

毎年恒例となっている東北アジア研究センター公開講演会が、2014年12月6日(土) 14:30～17:00、TKPガーデンシティ仙台にて開催されました。御承知のように東北アジア研究センターは総合的な地域研究を目指した研究組織であり、公開講演会のテーマも年によって文系のもの、理系のもの、その融合的なものバラエティーに富みますが、今年度は自然科学的なテーマです。

講師は本センターの平野直人准教授と千葉聡教授のお二人で、平野先生には「東北アジア地域の地殻変動と太平洋」、千葉先生には「東北アジア地域の生物とその起源」と題してお話をいただきました。極東ロシアから日本、中国に至る東北アジアには、非常に魅力的な自然が残されています。すなわち、活発なマグマ活動を展開する火山群、帯状につながる島々、森林や湿地、草原、あるいは砂漠に覆われた広大な平野など、地形的にも多彩な姿を見せており、そこには高い山脈もあれば大河も、また巨大な湖もあります。

それと同時に、こうした多様な環境は、世界的に見ても極めて豊かで貴重な生物を育ててきたのです。講演会ではそのことを地質学と生物学の専門の立場からわかりやすく解説していただきました。

まず平野先生から、東北アジアの地質がどのように形成されてきたかを探り、太古の時代からの地殻変動の謎に迫るお話をいただきました。次に千葉先生から、この東北アジア地域に息づく生物たちの多様さと特徴を紹介し、その多様性の起源を探るお話をさせていただきました。いずれも、数多くの美しいスライド資料などとともに紹介していただき、ビジュアルに東北アジアの自然の豊かさを体感することができました。

当日は仙台の冬の到来を告げる寒い日でしたが、100名近い熱心な市民の皆さんが来場され、質疑も活発に行われました。なお、今回の公演は東北アジア学術交流懇話会との共催で行われたものです。(瀬川昌久)

2 日露ワークショップ
**日本文化を教えるⅡ：
 ロシアと日本の日本研究者の対話**



報告するエレナ・ヴォイティシク東洋学科長

東北大学と大学間学術交流協定を結ぶロシア・ノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科では、日本語・文化に関する教育が行われている。東北アジア研究センターは、2008年以來、同大で日本語を学ぶ学生を対象とした日本アジア講座の開催などを通じた交流を行ってきたが、平成25年9月、同大及びロシア交流推進室・大学院文学研究科・大学院国際文化研究科との共催で、日本語教育に関するワークショップ「日本文化を教える：ロシアと日本の日本語教育の現場から」を開催した。二年目の今回は、2014年11月29日、東北大学附属図書館多目的室を会場に、日本の歴史・文化研究をテーマに研究交流ワークショップを開催した。ワークショップでは、ノボシビルスク大学から東洋学科長エレナ・ヴォイティシク



会場の様子

教授「シベリアにおける日露文化交流」、エレナ・シモノヴァ教授「マスコオブリとタオヤメブリ：日本文化におけるジェンダーステレオタイプの影響」、エヴゲニヤ・フロロヴァ准教授「通過儀礼と幼稚化する現代社会：日本とロシア」、考古学を専門とするパーヴェル・ヴォルコフ教授「現代の実験考古学と民族学の発展の見通し」、さらに同大出身のポダルコ・ピョートル教授(青山学院大学・ロシア人ディアスポラ研究)「現代日本のロシア人ディアスポラと『露日関係問題』」の五つの報告を得た。本学からは長岡龍作教授(文学研究科・美術史)「日本における日本美術史研究の現状」、阿子島香教授(同・考古学)「現代日本考古学の展望：方法論的な特色および社会的な背景」、窪俊一准教授(情報科学研究科・メディア情報学)「日本におけるマンガ研究の現状」、高倉浩樹教授(東北アジア研究センター・社会人類学)・及川高氏(同教育研究支援者・文化人類学)「東日本大震災後の無形文化遺産調査と日本研究」による四報告と、千葉正樹教授(尚絅学院大学・日本史)、佐藤勢紀子教授(国際文化研究科・日本文学)によるコメントが行われた。本学の報告者は、いずれも日本アジア講座で講師を務めた経験がある。当日は佐藤弘夫文学研究科長が開会の辞を、黒田卓国際文化研究科長が閉会の辞を述べ、岡洋樹東北アジア研究センター長が議長を務めた。(岡洋樹)

③ 「災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット」ワークショップ

東北とクライストチャーチ

——大震災の社会文化的影響について再考する

災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット(災害人文研究ユニット)は、2014年10月30日(木)～31日(金)にかけて、ニュージーランド・クライストチャーチ市のカンタベリー大学で震災と文化にかかわるワークショップ「Tohoku/ Christchurch: Reflections on the Socio-cultural Impacts of the Quakes」を開催した。会議は、本センターの高倉浩樹教授とカンタベリー大学のスーザン・ブーテレイ教授(本センター元客員教授)によって企画された。日本からは兼務教員の木村敏明教授(文学研究科)を含む4人、ニュージーランドからは8人が報告した。これ以外に現地から13名が加わって会議が行われた。2日間にわたり、東日本大震災とニュージーランド地震後の社会・文化的影響の共通点と相違点、人文社会系研究者の役割について熱心に討議された。

ワークショップの当初の目的は、東日本大震災についての経験と調査研究の成果を、国外の日本研究者や学生と共有し交流することであった。受け入れ教員であるブーテレイ先生は日本文学研究者であり、当大学の日本学科の主任でもある。しかし準備の過程でニュージーランドの地震の

経験についての報告もいれ方向的に討議することとなった。

会議のなかでは日本側の研究者による調査成果や方法論、また阪神淡路大震災との比較研究の発表があった。ニュージーランド側は、東日本大震災がニュージーランドで受け止めについての報告のほか、2011年2月に起きたカンタベリー地震の報告とこれに対する人文系研究者の実践的取り組みについて発表された。

二日間にわたる議論を通して、被災地の人文研究者には専門分野の研究の観点から行うべき領域が有り、それを模索・開発・実践していくことの必要性が確認された。また、日本研究にとって災害の意味が検討された。というのも日本列島の災害は歴史的にも数多く記録されており、その被災や対応は日本理解にとって重要な側面をもつからである。第三に、災害研究の比較の重要性である。被災地の研究者は自らの被災地を中心に考えるが、他の被災地の状況と比較・連携することで、多くの研究・実践上の突破口が見えてくることを確認した。また成果公開について芸術系の研究者との連携が有効な手立てとなることも示唆された。

(高倉浩樹)

④ 「21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」

加藤九祚先生講演会

2015年1月31日、「21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット特別講演会」と題して、加藤九祚先生(創価大学、国立民族学博物館名誉教授)の講演会が本センターで開催された。

加藤九祚先生は、シベリアと中央アジアの文化人類学や歴史学分野で、日本における先駆者としてご高名である。90歳をとうに過ぎた今も、中央アジアでの発掘調査にお出かけになるなど、そのご活躍は衰えることを知らない。

当日のご講演は、加藤先生がなぜシベリア研究を志すことになったのか、そのきっかけとなったシベリア抑留のお話から始まった。上智大学でドイツ語を学んでいた先生は、戦局の悪化する中、志願して入隊。現在の東北大学川内キャンパスの敷地にあった仙台の第二師団で訓練を終えると、満洲国(現在の中国東北)でソ連との国境近くに配置された。1945年8月の日ソ戦争に伴い、シベリアに抑留された経験をお持ちである。

加藤先生のシベリア研究は、シベリア抑留という過酷な状況のなかでロシア語を学ばれたことが端緒となった。およそ5年にもわたる抑留生活を終えて帰国した先生は、シベリアでの体験を「フィールドワーク」として見つめなおし、

この地域の専門家として歩まれることになる。

しかし、その歩みは決して平坦なものではな

かった。上智大学に復学してからも、かたわら出版社に勤務する苦学生であったし、シベリア抑留者がシベリアを研究することで、当局の監視の対象ともなった。初めての著作『シベリアの歴史』をはじめ、今や古典として仰がれる著作の数々も、そうした多難な時期から執筆されたものだ。書くことで未だ若々しさが保たれている、という先生のご冗談とも本気ともつかないお言葉も、真実味をもって深く胸に刻まれた。

なお、当日の会場には若手からベテランまで、歴史学から文化人類学、言語学などの研究者が30名近く参集したのも、ひとえに先生のご業績の数々とお人柄を慕ってのことであろう。

講演会のあとに開かれた日本シベリア学会の創設会議では、名誉会長に加藤先生が選出された。加藤先生の後進として、出席者も思いを新たにシベリア研究の道に邁進することが期待される。

(麻田雅文)



熱弁をふるう加藤九祚先生

5 「20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」主催 日露歴史学者セミナー

プロジェクト研究『20世紀ロシア・中国史再考』研究ユニットの一環として、2014年12月22日、モスクワで日露の歴史学者によるセミナーを開催した（これまでの2回はノヴォシビルスクで開催）。今回もロシア側の調整は、パプコフ氏に尽力いただいたが、それ以外のロシア側の参加者はモスクワ大学のグセフ教授、レオンチェフ教授、連邦保安庁アカデミーのハウストフ教授、メモリアルのペトロフ博士、ロシア史研究所のコスティルチェンコ教授、ドロズドフ氏で、日本からは寺山のほか、学振特別研究員の立石洋子さんが出席した。スターリン時代の研究に関して、各人が新しく見出した史料をもとに新発見を披瀝した有意義な会合であった。

今回のセミナーの学術的成果は、ロシアの大手人文系出版社ロススペン社の「スターリニズムの歴史」シリーズから、論文集『スターリニズム史の政治的・社会的側面：新しい事実と解釈』として3月に刊行される。本



セミナー開催時の様子

論文集には、セミナーには出席できなかった太平洋国立大学のクリニチ先生、ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・極東諸民族人類学研究所のチェルノルツカヤ先生（ともに2014年のセンター客員教授）の論文も含まれており、センターの日露研究交流の大きな成果であるといえよう。

ロシアとの学術交流によるロシア国内で3冊目の出版となる本書も、ノヴォシビルスクの歴史研究所のパプコフ先生（2005年のセンター客員教授）の御協力を仰いだ。パプコフ先生にはこの場を借りて感謝申し上げたい。東北大学（ロシア交流推進室）がモスクワ大学へ派遣している駐在員から、大学が協定を結んでいるはずのモスクワ大学でのセミナー開催について妨害を受けたが、場所を代えて無事に開催することができたことを付言しておく。刊行物の表紙にある通り、東北大学のロゴタイプを押してアピールしているのだが。

（寺山恭輔）



セミナーの成果刊行物の表紙

6 共同研究 「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の 構造的特質とその変容に関する研究」 平成26年度第2回研究会

平成26年12月7日（日）、共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」の本年度第2回研究会が開催された。まず鈴木仁麗氏（明治大学）による講演「満洲国のモンゴル統治—国際環境と「内政」の課題—」では、日本の傀儡国家満洲国は、その西部にモンゴル地域の自治省として興安省を設置していた満洲国のモンゴル政策について氏の近著『満洲国と内モンゴル 満蒙政策から興安省統治へ』の内容を中心に論じられた。

鈴木氏の講演に続き、3件の研究発表が行われている。バトツェンゲル・ナツァグドルジ（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）「ホンゴロイ・キルギスの所属に関して」は、17世紀におけるエニセイ地方のキルギスとオイラトの関係から説き起こし、清朝が黒龍江に移住させたキルギスが、ガルダンの敗北後ズーンガルと分割され、清朝に服属したアラブタンの属民となった人々であったことを論じる。包呼和木其爾（東北大学環境科学研究科）「清代内モンゴル・ハラチ

ン地域における盗賊問題と地域秩序：盗賊バイリング、メイレセンゲの捕縛令を事例に」は、19世紀同治年間に内モンゴル東部ハラチン地方で発生した盗賊事案の発生・鎮圧経過の分析を通じて、ハラチン地方社会の秩序維持における佐領や、アイマクと呼ばれる組織の役割を解明するもの。矢口啓朗（東北大学大学院文学研究科）「1830年代のシリア危機におけるオスマン帝国に対するロシアの関与」は、1833年のウンキャル・スケレッツ条約をめぐるロシアとオスマン帝国の角逐を論じたものである。

（岡洋樹）



鈴木仁麗氏の講演



研究会の様子

7 上廣歴史資料学研究部門主催講座

地域の歴史を学ぶ

◎岩出山Ⅲ 城—その知られざる歴史—

2014年11月30日、上廣歴史資料学研究部門は、岩出山古文書を読む会とともに、「講座：地域の歴史を学ぶ ◎岩出山Ⅲ 城—その知られざる歴史—」を大崎市岩出山公民館（スコレハウス）にて開催いたしました。

岩出山での講座は、部門発足以来行っており今や恒例となりつつありますが、来場者は年々増加の傾向にあり、今回は過去2回を大幅に凌ぐ260～270名の方々にお越しいただき、会場のスコレハウスは人で溢れかえりました。なかには遠来の方も多数見受けられ、今回のテーマである城郭への関心の高さをうかがわせました。

演者・演題は次のとおりです。

- ①菅野正道（仙台市史編さん室長）
「戦国城館から近世城郭へ」
 - ②佐藤公保（米沢市教育委員会教育管理部文化課文化財担当）
「米沢館山城—伊達と上杉の足跡が残る城—」
 - ③菊地優子（元岩出山町史編さん専門員）
「岩出山城—城と町の変遷—」
- 菅野氏の講演は、中世から近世へ移行していくなかで城の

役割はいかに変わっていったのかを時代の変遷とともに論じたもの

です。菅野講演は、あとに続く菊地・佐藤講演へのいわば序章の役割を果たすものでもありました。

佐藤氏の講演は、米沢館山城が伊達氏の居城であるという説を文献から批判し、さらに発掘調査の成果からその実態を解明し、伊達から上杉へと領主が変わるなかで城がいかに変貌を遂げていったのかを考察しました。文献・発掘双方の成果をふまえた説得力のある内容でした。

菊地氏の講演は、中世から近世へと移る過程で、岩出山城がいかに変貌を遂げ、町はいかに整備されていったのかを考察したものです。現存する絵図をふんだんに用いた講演は非常に興味深いもので、講演を聴き来られた方々も真剣に聞き入っておられる様子でした。

多大なるご支援を賜りました関係者の方々、そして会場に足を運んでくださった聴講者のみなさまにこの場を借りあらためて厚く御礼申し上げます。（友田昌宏）



講演会の様子



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究センター叢書第53号
岩出山伊達家の戊辰戦争
—吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む—

友田昌宏、菊地優子、高橋盛（編）
2014年12月刊 B5判110頁



吾妻家は代々岩出山伊達家（仙台藩主の伊達家の一門）の家老を務めた由緒ある家柄です。とりわけ、維新後、岩出山伊達家の北海道移住開拓に尽力した吾妻謙（あがつま・ゆずる）は知る人ぞ知る存在です。その吾妻家には現在も多くの古文書が残されていますが、慶応4年（1868）の「奉宿若御用留」もそのひとつ。表題にある「奉宿若」とは仙台藩の奉行（家老）・宿老・若年寄のことで、彼等から岩出山伊達家の仙台屋敷への通達、および同家から仙台藩への伺がこの史料には数多く収められており、戊辰戦争当時の仙台藩や岩出山伊達家の具体的な動向が克明にわかる好個の史料です。このたび、史料の所蔵者である吾妻稯氏・行雄氏（本学農学部教授）の御快諾をえて、岩出山古文書を読む会の菊地優子（現会長）・高橋盛（前会長、現顧問）両氏の全面的なご協力のもと、この貴重な史料が当センターの叢書としてはじめて日の目を見ました。（友田昌宏）

東北アジア研究センター叢書第54号
上山市立図書館蔵 上山藩明新
館文庫目録と研究

磯部彰（編著）
2014年12月刊 B5判176頁



江戸時代、山形置賜地区の上山は、幾つかの大名家を経て、藤井松平家が藩政を布き、明治維新に到った。江戸後期に創設された上山藩の藩校明新館には、天輔館以来の和漢書が蒐集されていたが、現在に到るまで上山市立図書館に未整理の状態では保存されていた。

今回、東北アジア研究センターのプロジェクト「出版文化資料データベース研究ユニット」及び共同研究「典籍文化遺産の研究」では、その伝存古典籍の整理と分類を図り、漢籍類を四部分類に、和書を十進法分類にした目録を作成した。同時に、江戸時代の上山藩の沿革史、明新館文庫本漢籍の特徴について、その書誌的概略をまとめ、上山藩校明新館の学風の一部も紹介した。また、上山藩が江戸、もしくは大坂加番という役務の傍らに、書籍を蒐集し、藩士教育に努めたことを蔵書史から証拠づけた。

本書の出版を通して、当ユニット及び共同研究の成果を公表することによって、置賜地区の地域教育活動を支援し、一定の社会貢献を果たした。（磯部彰）



**東北アジア研究センター報告第13号
清朝とモンゴル人**

サンプルドンドヴ・チョローン、
胡日查、岡洋樹（編）
2014年8月刊 B5判 288頁



東北アジア研究センターは、2003年以來、ほぼ隔年でモンゴル国ウランバートル市において、主にモンゴルの歴史に関わる国際シンポジウムを開催してきた。この論文集は、2012年9月7日にモンゴル科学アカデミーで開催された5回目のシンポジウムの報告論文集である。

このシンポジウムは本センター、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内モン古師範大学旅游学院による共催で、論文集の編集はモンゴルから歴史研究所所長S.チョローン博士、中国から旅游学院蒙古歴史文化研究所長胡日查(ホルチャー)教授、本センターから岡が担当した。「政治・社会」と「史料研究」の二部から成り、「政治・社会」の部では主に清代のモンゴル社会の構造に関する論文12編、「史料研究」の部では档案史料や年代記史料に関する研究論文8編の計20編が収録されている。論文はいずれもモンゴル語による。(岡洋樹)

**東北アジア研究センター報告第14号
蒙漢字典
—資料編・原本影印—**

栗林均（編）
2014年11月刊
B5判 548頁



『蒙漢字典』は、民国17(1928)年に北京の蒙文書社から刊行されたモンゴル語と漢語の対訳辞典である。活字版印刷で、上下2冊の線装本の体裁をとっている。辞書本文256丁(512頁)、巻頭に目録、勘誤表、蒙文十二字頭が付されている。

本字典は、内容的には清朝時代の木版刷りのモンゴル語・漢語・満洲語辞典である『欽定蒙文彙書』(1891)を継承しながら、モンゴル語と漢語を抽出したものである。形態的には近代的な活版印刷によっており、モンゴル語辞書の歴史においていわば近世と近代の橋渡しとなった辞書として位置付けることができる。

『蒙漢字典』が現代において希少な文献となっていることと、同字典の内容が貴重な資料的価値を有することから、これを影印として公刊し、研究者の便宜に供した。本センターの「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動の一環として公刊された。(栗林均)

**東北アジア研究センター報告第15号
よみがえる江戸時代の村田
—山田家文書からのメッセージ—**

高橋陽一、佐藤大介、小関悠一郎（編）
2014年11月刊 B5判 261頁



東日本大震災後の2011年より、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークと宮城県の村田町が中心となり、町内の旧家山田家で古文書の保全活動が実施された。村田は江戸時代後期以降に紅花の流通拠点として賑わいをみせた町であるが、山田家は酒造などで町の商業を切り開いたパイオニア的存在で、本活動の結果、従来知られてこなかった江戸時代前期の町の歴史を解明できる史料が多数確認された。仙台藩の町場研究の発展に繋がる可能性も秘めた、貴重な史料群である。

これを受け、2013年6月には両団体と東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門の共催により、山田家文書を活用した講演会を開催した。本書は講演会に携わった3名による報告書であり、講演録のほか、約2000点に上る同文書の目録や重要史料の解説文を収載している。歴史資料保全活動の成果と郷土史の掘り起しの一つの方法を示すものとして、本書は重要な意味を持っている。(高橋陽一)

**東北アジア研究センター報告第16号
ヴェールの向こう側から
—北朝鮮民衆の文化人類学的分析—**

李仁子、瀬川昌久（編）
伊藤亜人、安鍾秀、李仁子（著）
2015年1月刊 B5判93頁



日本にとって直近の地域でありながら、これまで直接的調査研究の対象外であった北朝鮮社会についての最新の研究成果に触れ、現状の分析と今後の研究を展望することを目的に、2014年2月に開催された東北アジア研究センターシンポジウムの成果報告書。

目次は以下のとおり；趣旨説明／瀬川昌久、人口動態から見る北朝鮮の社会過程と住民生活の変化—体験およびその補充資料に拠って—／安鍾秀（北韓学大学院大学校研究員、人口動態学）、北朝鮮社会研究の課題と展望—民衆生活の非公式領域—／伊藤亜人（東京大学名誉教授、文化人類学）、移民としての脱北者—日本に定着した脱北帰国者を事例に—／李仁子（東北大学教育学研究科准教授・東北アジア研究センター兼務教員、文化人類学）、コメント／轟莉莉（東京女子大学現代教養学部教授、文化人類学）、三村光弘（環日本海経済研究所調査研究部長・主任研究員、経済法）、質疑応答／全員、あとがき／瀬川昌久。(瀬川昌久)



●客員教授
**コンドラシン・
ヴィクトル**

ペリンスキー名称国立ペンザ
教育大学ロシア史・地域誌・
歴史教授法学科長、教授

私はモスクワから650km、ヴォルガ川から200kmのペンザにあるペンザ国立大学でロシア史の研究・教育を行っています。ペンザは偉大なロシアの詩人、作家、演出家や学者、宇宙飛行士の故郷でレルモントフ、メイエルホリド、クリュチェフスキーその他著名人を輩出してきました。日本という素晴らしく驚くべき国、しかも非常に心地よくもてなし好きの仙台にある東北アジア研究センターに滞在することは、私の人生にとってとても重要な事件ですし、大変光栄です。

私はすでに長年にわたり日本のロシア経済史、農業史の研究者と協力関係を築いてきましたが、20世紀ロシア史の研究において日本の歴史家たちの貢献をとて高く評価し、ロシアの研究者たちとの共同研究の顕著な成果を認め、将来性を感じています。私の基本的な研究テーマは20世紀ロシア

農民と農業の歴史です。この100年間にロシアが工業的近代化の必要のために農民を利用し、農村から資源をくみ上げたプロセスで、農業国家から工業国家、大国へといかにして変貌したのかについて研究しています。特に内戦史、集団化と1930年代初頭の飢饉、スターリニズム時代を専門とし関連著作、文書集はロシアばかりでなく日本でも出版されてきました。私のセンター滞在によりロシア史研究における日本の研究者との学術的かつ私的な関係が強固なものとなり、今後の協力や興味深い出会いのための新たな刺激になることを願ってやみません。学術的な問題だけでなくクラシックギターやテニス、写真、自然の中の散歩といった様々な趣味の面でも、私と関心を同じくする新たな友人、同僚と巡り合えることをとても期待しています。

(翻訳：寺山恭輔)

受賞

●佐藤源之教授がフランク・フリッシュクネフト・リーダーシップ賞を受賞

東北アジア研究センター佐藤源之教授は2014年10月28日、米国デンバー市で開催されたSEG(地球物理探査学会)年次シンポジウムにおいて、2014年フランク・フリッシュクネフト・リーダーシップ賞(2014 The Frank Frischknecht Leadership Award)を受賞した。本賞は、SEGの浅層地球物理部門とEEGS(環境並びに工学地球物理学会)が共同で浅層地球物理学の分野で長年にわたり先導的な役割を果たしてきた個人を表彰するものである。佐藤教授は地中レーダー技術での世界的な貢献、特に先進的なボアホールレーダーの開発、地表設置型レーダーによる地滑りモニタリング、また地雷検知や津波被災者捜索などの功績が認められた。



BOOKS 著書紹介

東北アジア学術読本4

**食と儀礼をめぐる地球の旅:
—先住民文化からみた
シベリアとアメリカ—**

高倉浩樹、山口未花子(編)
2014年10月東北大学出版会刊
四六判 226頁



本書は2012年11月10日に東北大学さくらホールで開催された公開シンポジウム「食と儀礼をめぐる地球の旅:シベリアとアメリカ」の報告に基づき、シベリア・北米・南米の先住民社会、それぞれの大陸を旅してきた研究者が、個々の地域で営まれる人間生活の根幹をなす食べ物とそれを得るための社会のしくみ、それと世界観や宗教にからんだ儀礼を中心に紹介している。現代世界だけでなく、先史学・考古学の視点も踏まえ、各地における文化的多様性がどのような広がりをもっているのかを明らかにし、新しい世界理解の方法を提供するものとなっている。

センター関連出版物

東北アジア研究専書7号

**展示する人類学
日本と異文化をつなぐ対話**

高倉浩樹(編)
2015年1月昭和堂刊
A5判 272頁



人類学は旅の学問である。研究者は異境へと赴き、そこでの見聞を故郷へと伝えるからである。旅はそこで終わるわけではない。人類学者は再び異境へと赴き、今度は逆に異境に対して故郷を伝えようとする。本書はこのような人類学の営みのなかで、研究成果を展示という形でおこなった人々の記録である。と同時に、そこから得られた研究を社会に開くということの可能性を探求するものである。論文という枠に留まらない、博物館という制度にも収まらない、新しい形のアウトリーチへの挑戦の書である。映像研究者、博物館関係者、展示デザイナーなどにもすすめたい。

活動
風景

東北アジアの生物多様性:その形成史と保全

東北アジア研究センター教授 千葉 聡

日本から極東ロシア、中国に至る東北アジア地域は、同じ緯度で比較した場合、世界で並はずれて動植物の多様性の高い地域です。また大陸には、トラやヒョウといった大型肉食哺乳類が息づく森林が広がっています。この豊かな生物相はどのように形成されてきたのか、なぜこの地に高い種多様性が形作られているのか、こうした問題を明らかにすることによって、新しい種が生み出される仕組みや、多くの種が共存するメカニズム、という生態学の重要な課題の解明に貢献することができます。

研究室では、中国から極東ロシアにかけての陸上無脊椎動物相が、極端に高い種多様性を持つことに注目し、その中でも特に昆虫類と陸生貝類をモデル系として、高い種多様性をもたらした機構を解明すべく、調査、研究を進めています。特に中国甘粛～四川にかけての地域は、世界で最も陸生貝類の種多様性が高い地域のひとつであるとともに、他に例のないユニークかつ多様な形の陸生貝類が息づく地域です。私たちは、この高い種の多様性と形の多様性が、これらの捕食者であるオサムシ科昆虫類との共進化によって生み出されたと考えています。この過程では、捕食者が、被食者に対しより攻撃力を高めるさまざまな攻撃戦略を進化させるとともに、被食者がそれに対し自身を防御するため、さまざまな防御戦略を進化させ、両者が軍拡競争的に進化します。その結果、非常にバラエティに富んだ殻の形（防御戦略）が進化し、それがさらに種の多様化も促進する、という考えです。私たちは、野外調査や室内での操作実験、分子遺伝学的実権を行って、この仮説の検証を試みています。

このような生物間の相互作用をドライビングフォースとして進化を駆動するためには、長期にわたり安定な環境がなければなりません。たとえば大きな気候変動は、種の絶滅をもたらし、生物間相互作用による進化プロセスをリセットしてしまいます。実は、東北アジア地域は、過去の氷期、間氷期の気候変動の



バイカル湖固有のヨコエビ類

インパクトが、同じ緯度では世界で最も軽微であった地域とされています。その一例としてロシア極東地域では、最終氷期においても氷床に覆われることなく、森林が形成されましたが、他の同緯度の地域は広く氷床に覆われていました。このような安定な環境が、長期にわたる生物間相互作用による進化を可能にしたのだと考えられます。

私たちはこのような安定した環境の下で、なぜ地域ごとに特徴的な生物相が生成されてきたかを明らかにするために、淡水生物モデル系として、バイカルから極東ロシア、日本にかけての生物相の成立過程の解明に努めています。400 万年以上の歴史をもつバイカル湖には、非常に多様かつユニークな固有の生物相が形成されていますが、その形成過程はまだよくわかっていません。私たちは分子系統学の手法を用いて、種の移動、分化の歴史を推定し、バイカルの生物相の形成史を明らかにするとともに、それとアムール川水系および日本の琵琶湖水系の生物相との関係の解明を試みています。その結果、従来中国南部と関係が深いと考えられてきた琵琶湖の生物は、むしろ北方系の生物相と関係が深く、特にバイカル湖の生物とも密接な関係を持っているらしいことが明らかになってきました。このように東北アジアの生物多様の研究性は、生態学の普遍的な課題の解明につながるとともに、私たちが住む日本の身近な生物がたどった歴史を知ることもつながるのです。

このユニークかつ豊かな東北アジアの生物相は、いま地域の急速な経済発展によって危機にさらされています。森林伐採はもちろん、河川、湖沼の水質の悪化により、多くの種が絶滅の危機を迎えています。しかしその実態は、まだよくわかっていません。私たちはロシア科学アカデミー極東支部の研究者と協力して、特にアムール地域を中心として、生物種の生息状況の実態把握や希少種の保全を目的とした研究を行い、この地域の生物多様性の保全に努めています。



バイカル湖での調査風景

編集
後記

昨年、外国の研究者を招聘して東京のホテルに宿泊したところ、部屋に電話が無いことに気が付き連絡に不自由しました。最近、新設・改築のホテルでは携帯電話の普及を前提にして、部屋に電話の無い所が増えているようですが、来日したばかりの外国人には思わぬ盲点でした。電話と言えば、ひと昔以上前に、さる先生の研究室に何度電話しても繋がらず、会議でお会いした際に尋ねたところ「電話線ははずしてますから」という答えが返ってきたのにはいささか感動的でもありました。その影響によるものかどうか、私は未だに携帯電話を持っていません。気が付けば今や自分がサル先生です。(栗林 均)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第64号 2015年3月27日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。